

酒々井町

# 郷土研究会会報

第125号

平成19年7月1日  
酒々井町郷土研究会  
広報部

## 長福寺閑話

小坂 昭雄

三、県指定有形文化財

本寺の本尊は阿弥陀如来坐像であり、脇侍として多聞天・持国天の二軀があります。その他、如意輪観世音（木像二尺二寸六分）・不動明王（木像九寸六分）・弘法大師二体（木像九寸六分と石像一尺六寸）もあります。

昭和四十六年十一月、多聞天・持国天（共に木像二尺五寸）が酒々井町有形文化財に指定（本尊は未指定）されました。その後、当時の郷土研究会会長の相京晴次さん（故人）が、国立歴史民族博物館の白石教授（当時）と知人の間柄でしたので、相京さんが白石教授に町指定の二体について話をされると、東京国立博物館の資料部長（当時）である田辺教授（日本における仏像研究の第一人者でありました）に伝わりました。

昭和六十一年二月下旬の寒い日、同教授は二、三人を連れて当寺院に來られました。教授は、多聞天・持国天には一瞥をくれただけで本尊の阿弥陀如来に着目され、腕を組んで「これは凄い」と唸られました。



阿弥陀如来坐像

「総代さん、阿弥陀像を見せて貰えませんか」（当時、私は責任役員を任せていて、通称総代です）。「どうぞ」と返事をすると、本尊を台座から取り出して床に下ろしてくれとの事。今まで、古老から「秘仏」であると

伝授されてき、ご本尊を動かす等という前代未聞の事を言われても……。逡巡していると、相京さんが「小坂さん世界一の先生に見て貰うんだ、阿弥陀さんもきっと喜ぶよ……」、この一言で迷っていた私の気持は吹っ切れました。改めてご本尊に手を合わせ、お許しを戴き抱き上げてみると、以外に軽いのにびっくりしました。抱いた本尊を周囲の柱や板に触れないよう持ち出し、教授のご希望を叶えました。帰宅したその夜は、「途轍もない大きな事を行った」という興奮に包まれ、なかなか寝つかれなかったことを覚えていきます。

その後三回程来院され、種々綿密に調査のうえ、写真等も撮影され、本尊阿弥陀如来は、材質から中央作（京都）で平安仏である、また、多聞天・持国天は、平安末期か鎌倉初期の作であると鑑定され、何れも貴重な文化財であることが判明しました。

これに基づき県教育委員会に県指定有形文化財の申請を行ない、同年十月、県文化財委員である慶応大学柴田教授（当時）の調査があり、昭和六十二年二月二十七日付けで県の有形文化財の指定を戴きました。

田辺教授が来院されたある時、「この仏像の経緯を立証するものが有れば、国宝級だ」と独り言を言われたことが今でも脳裏から離れません。昭和四十六年の町指定に始まり、相京さん―白石教授―田辺教授と強い縁で結ばれ、我々の阿弥陀様が学術的に認められ、社会の脚光を浴びることは、檀家の一員としてこの上ない喜びであり、誇りであります。関係された各位に改めて御礼申し上げます。

酒々井町今昔

川島 俊彦

十、まつり

上本佐倉の神明大神社には「御輿」<sup>みこし</sup>はありましたが、「山車」<sup>だし</sup>はありませんでした。

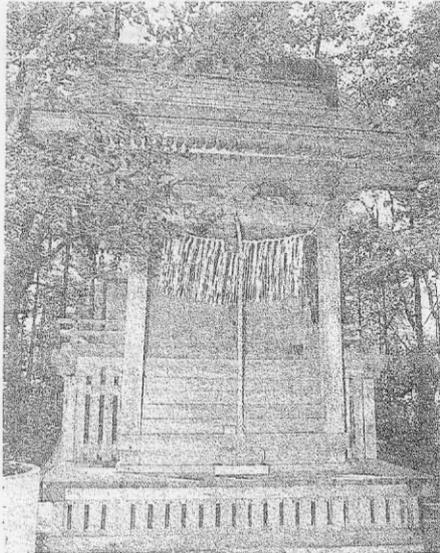
「御輿」は、昭和十九年頃までは「万燈」と一緒に担ぎ廻りました。

「山車」は、一度だけ（昭和二十一年頃）牛車を利用して走りました。

これには、花飾りなどをつけ、太鼓を叩き、笛を吹き、「ひよつとこおどり」を演じながら、本佐倉、上本佐

倉の名家の前を通りました。

戦争中は中止です。戦後は、車の数が多くなってきましたので、「幟」<sup>のぼり</sup>を神社の参道入口の両側へ建てました。因みに、まつりの日程は、毎年十月十三日に氏子<sup>うじこ</sup>の人々で幟立てを行い、十五日には幟倒しを行います。幟には大きな長い旗があり、それを長い杉の木に吊るための「藤」<sup>とう</sup>の輪をいくつもつけますが、幟旗が風にあおられ、藤の輪がこすれる「ギー」という音は忘れられません。現在<sup>いま</sup>では、行事は特に行わず、赤飯を炊いて神様にお供えするぐらいの行事になってしまいました。



神明大神社

十一、上本佐倉一丁目

「防衛庁団地」は五十一号線が完成してから建設されました。当地は、南東へ向けて傾斜した里山でした。

昭和十六年台風のため、酒々井・東金線の新堤<sup>にいづみ</sup>の小さな平橋が洪水によつて流され、馬橋からの交通は遮断され、僅か十メートル先の同級生が登校できず、手を振って合図をした覚えがあります。（現在は陸橋）

昭和四十二年頃から成田線は電化され、成田駅から荻窪行きが通るということで、黄色い電車を撮ろうとカメラマンが来たり、見物の人が沢山踏切の近くに集まっていました。SLは、これを最後に通らなくなりました。

十二、犬供養

毎年二月、三月頃と九月、十月頃行われる女性の犬にあやかるといふ行事。

近隣の女性達が「宿」<sup>やど</sup>に食物を持ち寄って行うもので、犬は安産であるということから、ムスビを「藁苞」<sup>わらぶと</sup>

に入れて二又の木に掛け、注連をつけ、道路の三叉路にその木を突き刺しておくものです。

この様なしきたりは、殆ど忘れ去られようとしています。平成十七年現在根古谷で見かけました。

これらを含めた諸行事は、酒々井町の行事として百二十以上も記録されています。(町史参照)

町の年中行事については、昭和初期の頃に、当時酒々井小勤務であった鶴岡とめ・加瀬はな両先生(いずれも故人)によってまとめられた貴重な調査資料が残っています。

### 市原方面を訪れて

北村 靖文

三月六日九時、町バスで市原方面に向け出発。車中では新会長さんのご挨拶や副会長さんのコース説明もあり和やかな雰囲気溢れる。十時過ぎ上総国分尼寺跡に到着、展示館で解説を聞く。奈良大仏建立に合わせて全国に十二国分寺の設立

決定。インドのストーバが中国で高い塔となりさらに日本で五重の塔になった。奈良のそれとは微妙に異なる市原国分寺の軒先瓦等々、解説に興味は尽きない。

圧巻は、パノラマ復元模型越しの窓外に突然復元された朱色の中門・回廊が出現した時。見学者一同から言葉にならない吐息がもれる。

さらに、復元現場では改めてその規模の壮大きさに感動する。また、市役所方面には、国分寺にあった高さ六十五米の七重の塔が、現庁舎よりも高く聳えていた、と言う。

昼食後、国分寺跡へ向かう。ここでは、発掘された七重の塔の心礎が広大な敷地の中に見られた。広々とした敷地、史跡、古大木に古代日本の活力に満ちた息吹が感じられた。

その後、さらに高瀧神社に移動。小湊鉄道高滝駅の東、徒歩五、六分の所に神社はある。九〇一年(延喜元年)成立の「三代実録」にも記された古社で、現社殿は江戸時代中期の権現造りとか。副会長さんの例によ

って解り易い語り口で解説していただく。天照大神とこの神社の祭神・瓊々杵尊と別雷命との関わり方、合祀された玉依姫命と合せて農業・治水・水の神様であり、農民からも愛されている神社であることを知る。それにしても、房総南部にこの様な立派な神社、知らなかった。

最後に、「道の駅」で休憩し、十六時四十分頃中央公民館に無事帰着。役員の皆さん、お世話様でした。



復元中門  
木造切妻造・本瓦葺・八脚門・76m  
間口9.9m×奥行5.4m×高さ7m

上総国分尼寺の復元中門・回廊

### 大好評、野草観察会

松井 信子

雨の晴れ間を縫つての野外観察。「何と言つても今日の目玉は、一輪草と二輪草の群落です」と大島さんからのお話があり、皆、胸をワクワクさせながら目的地、泉自然公園へ。

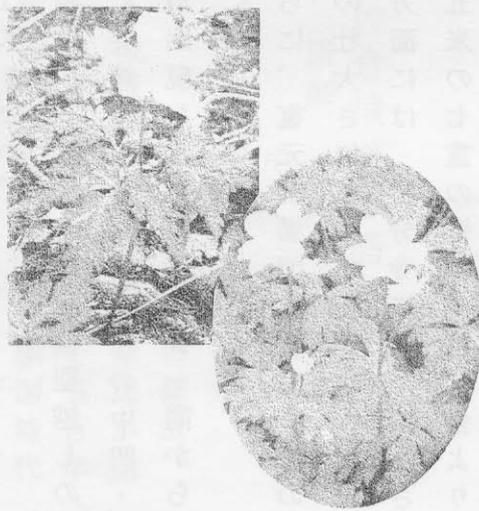
到着して歩き始めると間もなく、可憐なすみれが私たちを迎えてくれました。早速、タチツボスミレとすみれの違いについて論じ、花筏の雌雄の見分け方は、「葉に一ヶの花芽がついているものが雌、その他は雄」との説明、すっかり気分は植物学者。

野草園ではマムシ草やクマガイ草が咲き、野原ではツクバキンモン草やイカリ草・ホウチャク草・ツルカノコ草・ナツトウダイと、春の野草が咲き乱れていました。中でもタニキキョウの小さな白い花の群落には、皆心が和み、目を奪われました。又、「あっ、ヤブレガサ！」と奥山さんのひと声。そこにはヤブレガサの群れがあり、閉じているもの、二分に開いた形のもの等あり、その姿を見、その名の由来を納得してし

まいりました。まさに「一見に如かず」ですね。さすがに、あちらこちらでカメラマンのシャッター音がなかなか止みませんでした。

残念ながらカタクリの花は終わっていましたが、たくさんの実(種)がついており、三角形(▲)の形をしていました。

『あなたはカタクリのような人ですね』と言われたら、どう思えばよいのですか?との問いに、答えは「花言葉はネが深い」ですって。喜んでよいのかどうか。皆、クスリ。



目ぐすりの木のところでは、「白目が黄ばんでいる人が服用すると、肝機能が改善され、回復した。肝臓の薬です。直接目にさしても効果はあ

りません。」と岡田会長のお話がありました。目ぐすりの木の話が落語のネタに使われていることを知り、あまりの面白さに大爆笑。このネタを知りたい方は、奥山さんまで。とにかく、楽しい一日でした。

### 町内史跡巡りに

参加して

岡田 勝利

五月晴れのすがすがしい天候のもと、酒々井宿と本佐倉城跡の史跡めぐりに参加して、我が町内に、こんなに奥深い伝説的な史跡と情景があることに感銘を受けました。

京成酒々井駅での参加受付に始まり、町内外から七十四名もの人々の参加のもと、会長の挨拶、そして歩行時の注意事項等を受けて出発。

まずは中川の水神社から、双体道祖神、麻賀多神社、酒々井の井、勝蔵院、酒々井宿、佛母山吉祥寺、そして根古谷の館とめぐりました。

昼食後は、メインの本佐倉城跡です。軽い汗をかき、新緑の空気を吸いながら史跡巡りを無事終了できたことに喜びを感じました。

酒々井に住んでいながら、歴史的に重みある史跡の奥深さに感動しつつ、己の知識不足をちよっぴり反省、研鑽の必要性を痛感しました。今後は、楽しく興味を持って、ある程度の知識を身に付けたいと思いました。各史跡で、高木副会長より丁寧で奥が深く解り易い説明を受け、歴史の偉大さや、当時の人々の智慧や苦勞が理解できました。

酒々井区では、大川氏や区長さんの懇切な説明に感謝の気持ちがいっぱい。また、野草部の犬島・大沢さんからは、城跡に咲く草花の説明等を受け、楽しみが倍増しました。さらに、二人のお子様とご一緒に参加されたご夫婦もあり、自分の孫を思い出し、心が和みました。

今回、よかったのは、町内外から幅広い参加があったこと、野草部の方々から野草アドバイスを受けたこと、本佐倉城時代祭りの写真などが回覧され大変参考になったこと、などでありました。

今後も、適切な行事の計画をお願いするとともに、酒々井町郷土研究会役員はじめ当会員各位のご健勝を願っております。



勝蔵院  
(町内史跡巡り)

### 印旛村のむかし

M・M 生

私が生まれ育った印旛郡印旛村（旧印旛郡宗像村）の、今から五十年ほど前の生活を思い出してみました。

その当時、佐倉市に出る時は、船戸（舟戸）大橋が昭和三十八年に完成するまで、渡舟（印旛村師戸く佐倉市白井・船戸）で渡っていました。大人十円、小人五円だったと記憶しております。また、八千代市大和田に出る時は、印旛村吉田から阿宗橋を渡り、印西市（木下）に出る時は、隣村の本埜村を通って行ったものでした。

印旛村は、印旛沼と利根川に挟まれていたため、村から外へ出ることは少なかったのではないかと思えます。そのせいか、村独特の方言も随分ありました。

「あなた・あんた」を「おめ・いしや」。虫では、「カブトムシ」を「セイカジ」、「クワガタ」を「ハサミ」、「トカゲ」を「カマンチヨロ」。魚では、「ライギョ」を「カモチン」、「ザリガニ」を「赤ズメ」。植物では、「山ぶどう」を「かまゆび」。遊び道具では、「めんこ」を「ぺた」、「パチンコ」を「ゴムツパジキ」等々でした。

遊びは、季節の変化に応じていつも自然と一緒でした。

春先、フナが巣離れする頃は、小川から沼に注ぐ場所へ釣りに行き、土手でセリ・土筆を摘み、山では、山椒（木の芽）をつみ、野いちごをつまんで食べたものでした。

夏は、カブトムシを捕まえ、市場に売って小遣いにし、ザリガニを採ってはみんな食べました。（ザリガニのえさをいろいろ試しましたが、赤ガエルが良かったですね。でもへビにはかありませんでした。）

秋は、きのこ・やまぶどう・あけびなど、食べるものはいっぱいありました。台風時には、小川が氾濫し、水路や田んぼに魚がいて、学校が休校になると大喜びしたものでした。

冬、小川では竹笹を束ねたものを一週間ぐらい沈めておき、大きな網で竹笹をすくい小魚を採ったり（小エビ・ふな・くちぼそ）、シジミ採りをして遊ぶ。山では、ぶつちめ（小鳥を獲る仕掛け）をして遊び、田んぼ（今ののように乾田ではなかった）でも氷が張ると竹スケートをしたりした。こんな遊びを、兄弟や近所の大將達と大勢でしていたものです。

冬の朝、家の軒先には氷柱もあり、結構寒かった記憶があります。船戸大橋付近も、寒の強い朝は沼が一面凍ってしまうこともありました。

昔は、その世代々々での集まりがあり、盆踊りや秋祭り（収穫祭）を行って、青年団を終えると消防団に入団し、消防団を終えると旦那衆が集まる会に入りました。

現代は、昔に比べると、良いにつけ悪いにつけ、随分と変わってしまいました。



師戸の渡し場（昭和30年代）  
（「昔の印旛沼写真展」より）

郷土史講座の  
ご案内

「本佐倉城跡と酒々井宿」

講師 木内 達彦氏

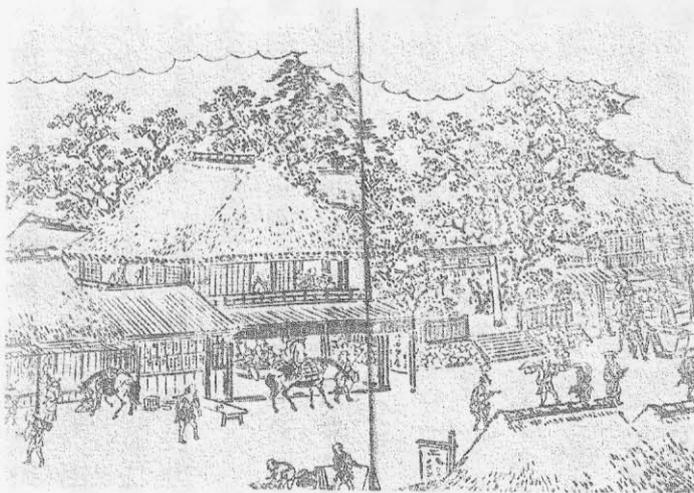
八月二十六日（日）

午後一時三十分

中央公民館研修室

本佐倉城は、下総守護千葉氏が室町中期の文明のころ（およそ五百年前）に築き、以後下克上の戦国時代に百年余り維持した居城で、下総の政治・経済の中心として栄えました。

三方を低湿地に囲まれた台地上を削平して曲輪を造り、侵入を阻むために堀を切り、土塁を築き、虎口を



酒々井宿の図（成田名所図絵巻より）

工夫して堅固な要害としています。関東を代表する中世の城郭として五百年の時を超えて奇跡的に残っていたことで、平成十年に国指定史蹟になりました。

酒々井宿は、天正十九年（一五九一）に成田道の宿場として取立てられ、物資や人を運ぶ継立の拠点となりました。文化・文政のころ（およそ二百年前）には成田詣の人たちで賑わい、勝蔵院は成田姉不動として酒々井宿繁栄の中心となりました。

見学

案内

名勝探訪

六本木方面

九月十一日(火)

雨天代替 九月十二日(水)

暑さがまだまだ残る中、六本木界限を散歩しましょう。六本木ヒルズは、随分とニュースで騒がれました。

森ビルの展望台では、東西南北を望めます、東京付近から遠く房総や横浜などを見てきましょう。

毛利庭園は、綺麗に手入れされ、ビルの合間にあつて落ち着きます。

ここは、毛利藩の屋敷跡で、赤穂浪士がお預けになった所だそうです。

昼食後、朝テレ通りを十五分位歩くと、有栖川宮記念公園に着きます。

元々は、忠臣蔵で有名な浅野家の下屋敷でしたが、盛岡藩下屋敷となり、

明治二十九年皇族有栖川宮家の御用地になりました。その後、大正七年

に高松宮家の御用地となり、昭和九年に都に賜与され、一般に公園として開放されました。

現在は、港区立の公園で、うっそ



うとしてとても静かです。近くには、南部坂、木下坂の名が残り、昔を偲ばせています。地下鉄日比谷線「広尾駅」に出て、帰路につきます。



六本木ヒルズ・森タワー

あとがき



今年の夏は『高温多雨』と報じられ、遅れていた梅雨に入りましたが、雨が降らず暑い日が続いています。岡田新会長の下、主な年間行事の一つである「町内史跡巡り」は、町内外から多数の方々のご参加（例年の約二倍）を得て大盛会で、また新入会員が増えてうれしいことです。皆様お知り合いを誘ってどんどん諸行事にご参加ください。十月には、文化庁主唱の「ウオーキング・イベント」が我が町で開催される予定です、八月二十五日の郷土史講座も本佐倉城跡に関するお話です。皆様をお待ちしております。

< 郷土研日誌 >

月日	内容	参加者
3.25	編集会議・最終校正(124号)	5
3.29	会報印刷(124号)	4
3.30	会報発送(124号)	15
4.6	県外見学会・野草観察会受付	6
4.7	研究会(千葉氏)	11
4.10	文化財研究会(本佐倉城跡見学)	8
4.17	古文書を読む会	6
4.24	野草観察会(泉自然公園)	35
4.29	編集会議	4
5.7	研修部会議	4
5.8~9	県外見学会(甲府方面)	31
5.15	文化財研究会	11
5.20	町内史跡巡り(城跡と酒々井宿)	74
5.27	編集会議	4
5.29	運営委員会(第3期行事予定等)	16
6.2	史談会	5
6.8	名勝探訪(王子方面)	39
6.12	編集会議	4
6.16	編集会議	3
6.24	編集会議	4
6.26	編集会議・最終校正	4

会計報告

《春の野草観察会》

(平成19年4月24日)

参加者 35名(町バス利用)

収入 7,000円

参加費 200円×35=7,000円

支出 7,125円

保険、駐車料金、諸雑費

差引 △125円

(野草会計より補填)

## 郷土研行事案内

平成19年7月～9月

	7 月	8 月	9 月
史談会	7日(土) 13:30 中央公民館会議室 「和田のむかし」⑧ 講師：高橋健一先生	休 講	1日(土) 13:30 中央公民館会議室 「和田のむかし」⑨ 講師：高橋健一先生
研究会	8月 4日(土) 13:30 中央公民館会議室 テーマ 「千葉氏の研究」(第5回) 講師 浜口 信義氏 (注) この研究会は、不定期に行われます。		
郷土史講座	<p>「本佐倉城跡と酒々井宿」</p> <p>日 時 8月26日(日) 13:30 開演 ( 13:00 開場 )</p> <p>講 師 木内 達彦氏 酒々井町企画政策課</p> <p>会 場 中央公民館 研修室 ( 2階 )</p> <p>後 援 酒々井町教育委員会 酒々井町文化協会</p>		
名勝探訪	<p>「六本木方面」</p> <p>9月11日(火) 雨天代替日 9月12日(火)</p> <p>(当日の問い合わせ 7:00～8:00 寺本まで)</p> <p>参加費(資料代) 100円(別途、入館料等が必要)</p> <p>集合時間・場所 8:30 京成酒々井駅・構内改札口前広場(階段上)</p> <p>コース 京成酒々井駅→大門駅(乗換：都営・大江戸線)→六本木駅          …六本木ヒルズ・森ビル(自由見学=展望台・美術館・庭園等)          …《自由昼食》…有栖川宮記念公園…日比谷線・広尾駅          ( 15:00頃現地解散の予定 ) (コースに一部変更の場合あり)</p>		
野草観察会	<p>9月25日(火) 小雨決行</p> <p>(当日の問い合わせ 8:30～8:50 犬島まで)</p> <p>観察場所 本佐倉城跡方面</p> <p>参加費(資料代) 100円</p> <p>集合時刻・場所 9:30 中央公民館前広場</p> <p>弁当・飲み物、敷物等各自持参(昼食は、観察コース内に適当な場所を選択) ( 15:00頃 帰着予定 )</p> <p>* 残暑の季節です、帽子もお忘れなくご持参ください。</p>		